

の詔と、「學明經」と記され明經科に察擧されたと考えられる者の分析を中心として、察舉科目としての明經科の性格を検討したい。

唐代即位儀禮の再検討

金子修一

中國の即位儀禮については、初め西嶋定生氏が、「天子即位—皇帝即位の順で漢代の即位儀禮が構成されていることを示され（漢代における即位儀禮）『中國古代國家と東アジア世界』所収）、次いで尾形勇氏が西嶋氏の所説を敷衍され、唐代までの即位儀禮は基本的に天子即位—皇帝即位の二段階から成っていることを示された（中國の即位儀禮）『東アジア世界における日本古代史講座』九）。

しかるに最近、松浦千春氏は西嶋氏の天子即位の史料解釋を批判され（「漢より唐に至る帝位繼承と皇太子」『歴史』八〇）、さらに唐代の第一段階の即位が天子即位であることを明確に否定された（「唐代後半期の即位儀禮について」『一關工業高等專門學校研究紀要』二八）。また報告者も、唐代の即位儀禮の中心が第二次即位の冊・寶の授受にあることを指摘した（拙稿「唐の太極殿と大明宮」『山梨大學教育學部研究報告』四四）。

残る問題は、先帝存命中の讓位の即位儀禮である。唐代では、先帝の讓位を受けた太宗・玄宗・肅宗に即位時の告天が見られる。また、各王朝の初代の皇帝は、最初に皇帝として告天してから天子を名乗っている。こうした内禪・外禪を問わず見られる讓位の即位の

告天と、先帝の崩御による傳位の即位に天子即位が見られないことは統一的に理解され、傳位の場合にのみ祖靈が介在するものと思ふ。従つて、傳位の第一次即位における皇太子の役割は、葬儀の主宰にあるのであろう。

六朝官人の政治意識

中村圭爾

六朝貴族が現實にしばしば官僚的形態をとることは周知の事實である。一方、六朝貴族がその存在において王朝を前提とせず、自體郷里社會を基盤とした政治社會上の支配者であつたこともよくいわれる。では貴族にとつて、官人であることはいかなる意味をもつか、あるいは、貴族にとつて官僚の地位、ひいては王朝はいかなるものと認識されていたか、ここでの政治意識とはそのような意味でもちいることばであり、この疑問への解答を用意することで中國古代の官僚制支配の意味と、六朝貴族制の一面面をあきらかにしようとするのが本發表の主眼である。

六朝官人には、官僚的存在に一種の嫌惡感、または拒絶感を示すかのようにみえるところがある。例えば、任官要請に應じる表現である「屈」、任官を正當化するために用いられる「親老家貧」という事情、俸祿の散賜という形で現れる俸祿の否定、脱俗隱遁的氣風等々からは、任官が不本意であり、それがやむをざる選擇であつたかのように感じさせられる。官人の職責に關しても、いわゆる俗

吏への輕侮、職務の輕視などがみられるが、それらも官僚に對する否定的意識の現れといえないこともない。

このような現象を、六朝時代の皇帝權力のありかた、君臣關係、門生故吏の關係などと關連させ、官僚制的形態をとる貴族制の特質と、官僚制的支配の性格を検討してみたい。

ティムール朝末期の社會における

神秘主義詩人ジャーミーの位置附け

久保 一之

神秘主義詩人ジャーミー Nur al-Din 'Abd al-Rahmān Jamī (一四一四—一九二二)は、ペルシア文學史上傑出した存在であり、その作品は早くから文學研究及び思想研究の對象となっている。しかし、ジャーミーに關しては、著述活動以外でも、ティムール朝や周邊諸國の支配層との親交、ナクシュバンディー教團への歸屬、マドラサの建設などがよく知られており、當時の社會を考える上で、彼の社會活動・社會生活が重要な研究對象であることは明かである。

考察のための史料としては、著名な年代記史料や聖者傳に加えて、これまで十分には利用されていないジャーミー傳や書簡集が擧げられる。特にウルンバーエフによって發表された、ジャーミーの自筆とされる書簡集からは極めて興味深い情報が得られる。これら諸史料から裏附けられる事實の概略は、以下の如くである。

ジャーミーには免稅特權が與えられており、君主等による金品の

下賜も頻繁に行われた。従つて確固たる經濟的基盤を獲得していたが、如何なる官職も保持したことはなかった。それでもジャーミーは、君主や宮廷の實力者と親交を保ち、公正な政治が行われるよう積極的に働きかけた。第三者の訴え・嘆願を宮廷に取り次ぎ、官吏の任免においても便宜を圖ろうとした。また、就學者やダルヴィーシュ、あるいは庶民の利益が守られるよう盡力した。

ジャーミーの發言力を過大評價してはならないが、直接・間接に宮廷と接觸し、影響を及ぼし得たのは確かである。これはジャーミーが宗教的權威として無視できない存在であつたことによると思われる。そのあり方は明かに有力ウラマーとは異なっている。

フィトラトの『東方政策』について

小松 久男

ペレストロイカ以後の急激な變動の中で、ソ連中央アジア地域の歴史はいま大きく書き換えられようとしている。それは近現代史、とりわけ二〇世紀初頭からロシア革命期にいたる時代の諸問題について顯著である。ソ連時代には利用が不可能であつた史料の發掘、公刊も着實に進みつつある。今回紹介する『東方政策』も、このような新しい史料に屬する。これはトルキスタンの指導的な知識人フィトラト(一八八六—一九三八)が、内戦下の状況の中で著した政治的なパンフレットであり、一九一九年にブハラ・ハン國の革命組織「青年ブハラ人」黨委員會によって刊行された。ここにいう「東